©日本カムリ学会 2008
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 4(1):22-24

中世ウェールズ女性の地位—グリフィーズ・アプ・カナンの娘グウェンスィアンを例に

吉賀憲夫

Gwenllian, the Daughter of Gruffudd ap Cynan— The Women's Position in Welsh Medieval Society

Norio Yoshiga

Abstract: What is Gwenllian like? Gerald of Wales depicted her as a warlike woman in his *Journey through Wales* and one recent study shows she is the author of the *Four Branches of The Mabinogion*. So which is the true Gwenllian, a warlike woman warrior or a wonderful storyteller?

Gwenllian could be compared to Boudica, the warrior queen of the Iceni who led a revolt against the Romans in AD 61. Like Boudica, Gwenllian fought against the Normans but she did not fight because she was aggressive or militant rather it was a Celtic tradition from the age of Boudica that she should fight as a leader of the Welsh army. This suggests that the women's position in Welsh medieval society was not necessarily inferior or submissive but was rather highly regarded.

ブレコンの助祭長であり、ヘンリー２世の外交官でもあったギラルドゥス・カンブレンシス（ウェールズのジェラルド）は、彼の著書『ウェールズ紀行』の中で、南ウェールズのウェールズ人君主グリフィーズ・アプ・リースの妻グウェンスィアン(1098?-1136)が、夫の留守に、宿敵のノルマン人城主モリス・ド・ロンドレスに戦いを挑み、敗れ、首を刎ねられたと記している。彼は、その記述において、グウェンスィアンはアマゾン族の女王ペンテシレイアのように、「馬にまたがり、軍勢の先頭に立って出撃して行った」と記述し、彼女を好戦的な女戦士として描いている。しかし彼は、なぜ彼女が戦うに至ったかという理由は述べていない。伝説によれば、彼女はモリス・ド・ロンドレスの策略に嵌り、やむなく自衛のため戦ったのだという。

ギラルドゥスは、グウェンスィアンをペンテシレイアに例えたが、彼女の真の姿は、西暦 61 年にローマ軍に対し反乱を起こしたイース

©日本カムリ学会 2008
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 4(1):22-24

ト・アングリアのイケニ族の王妃ブーディッカにむしろ近かった。ブーディッカの蜂起の理由は、夫の死後、彼女の国土を奪い、娘たちを陵辱したローマ軍退役兵士に復讐するためであった。ブーディッカは部族会議で反乱の指導者に選ばれた。ブーディッカに率いられたブリトン人は、最初は大勝利を納めたものの、最後の決戦に敗れ、約 10 万人のブリトン人が殺され、ブーディッカは毒を仰いで自殺したという。

ローマの歴史家ディオ・カッシウスはブーディッカを、男性の着けるトークや、男性の衣装であるチュニックやマントを着て槍を振るう女戦士として、男性的イメージをことさら強調して描いている。一方、歴史家タキトゥスによれば、ブーディッカは最後の決戦にあたり、ブリトン人のひとりひとりに、「ブリトン人は昔からよく女性の指揮の下に戦争をしてきた・・・私は王家の一員ではなく人民のひとりとして、奪われた自由と、鞭で打たれた体と、凌辱された娘の貞節のため、復讐するのである・・・これがひとりの女としての決心である。男らは生き残って奴隷となろうと、勝手である」と訴えたと言う。このタキトゥスの伝えるブーディッカの言葉を信じるなら、ここに表明されているのは、あくまでも女性としての立場からの戦う理由と、復讐への強い意志である。ブーディッカは決して男性の代役ではない。

グウェンスィアンはペンテシレイアやブーディッカと同様に軍を率いて戦った。ギラルドゥスは女性が軍を指揮するということに興味をもったのかもしれないが、ブーディッカの言葉にみられるように、ブリトン人は、昔からよく女性の指揮の下に戦争をしてきたのであった。それはひとつの伝統であり、それは 1000 年以上も後のグエンスィアンにその力を及ぼしたのである。ブーディッカとグウェンスィアンには、ブリトン人としての同じ血が流れているのは言うまでもない。

グウェンスィアンが軍を指揮したのは、彼女の好戦的な個性による「個人」の問題ではなく、ブリトン人の「伝統」によるものと言ってもよいが、それはまた当時のウェールズ社会における女性の高い社会的地位と無関係ではない。男女の権利に関しては、当時のウェールズの法律は、他の国々の法律よりも、はるかに男女平等に近いものを実現していた。ハウエル・ザーの法として知られるウェールズの法律や、「マビノギ」という中世ウェールズ英雄物語に、このことがはっきりと見て取れる。したがって中世のウェールズでは、女性や妻の立場は必ずしも劣悪なものでも、また服従的なものでもなく、かなりの主導

©日本カムリ学会 2008
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 4(1):22-24

権を発揮できる立場であったという。したがって、グウェンスィアンのとった行動は、当時のウェールズにあってはとくに奇異なものではなく、王妃または妻に与えられていた権能の一部であったと理解すべきであろう。好戦的としてのみ片づけられたのでは、グウェンスィアンは浮かばれないであろう。

では、グウェンスィアンは本当に「好戦的」な女性であったのだろうか。それを示す記述は何もない。彼女の性格を示す資料は、ギラルドゥスの語るものを除いて何もないのである。このように謎に包まれているグウェンスィアンであるが、彼女を「マビノギ」の著者だと推定する学者もいる。『中世ウェールズ文学(*Medieval Welsh Literature*, 1997)』の著者 Andrew Breeze はその理由を数多く列挙しているが、その主なものを挙げると、まず彼は「マビノギ」の著者が乳児や幼児に、また子育てに愛情あふれる眼差しを向けていることに着目し、著者は女性であり、従来の修道士著者説をしりぞける。次に、「マビノギ」の著者は北ウェールズやアイルランドの知識は豊富だが、南ウェールズの知識に欠けるところがあるとし、その理由は著者が北ウェールズ出身者であり、南ウェールズに移り住んだ者だからだと言う。さらに、「マビノギ」には南ウェールズに覇権を樹立しようとするダヴェド国の意図が強く読み取れるが、それはグウェンスィアンの夫グリフィーズの意思でもあったとする。加えて、その著者はウェールズ法に詳しいことから、宮廷の文化に詳しく、王家に繋がる人物と考える。しかし、「マビノギ」の物語の組み立てが稚拙であることから、著者は吟唱詩人のようなプロではなく、素人であると Breeze は考える。これらから導きだされる結論は、「マビノギ」の著者は北ウェールズ王家に生まれ、結婚して南ウェールズに住んだグウェンスィアンだと言うのである。しかし、これらはすべて推論であり、状況証拠に過ぎず、グウェンスィアンを「マビノギ」の著者と断定する明確な証拠はない。

しかし、この説をひとつの可能性として考えるとき、ギラルドゥスの言う好戦的な女戦士としてのグウェンスィアンと、幻想に溢れた英雄物語の著者としてのグウェンスィアンの間には大きな隔たりがある。真実がどの辺りにあるのか、それは軽々しくは言えないが、そのどちらを取ろうと、またその両者が混じり合ったグウェンスィアン像を描こうと、そこには中世ウェールズの強い意志と決断力をもち、豊かな想像力と感受性を有した女性を見いだすことができるのである。